広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語中級の読解の読み指導法
Author(s)	ユスフ シャルル バングン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 18期 : 220 - 224
Issue Date	2004-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038868
Right	
Relation	

日本語中級の読解の読み指導法

ユスフ・シャルル・バングン

Ⅰ．はじめに

日本語能力試験の二級と三級の認定基準を見てみると、三級が「基本的な文法・漢字（三百時間程度）・語彙（千五百語程度）を習得し、日常生活に役に立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力（日本語を三百時間程度学習し、初級日本語コースを修了したレベル)」、二級が「やや高度の文法・漢字（千字程度）・語彙（六千語程度）を習得し、一般的な事柄について、会話ができ、読み書きできる能力（日本語を六百時間程度学習し、中級日本語コースを修了したレベル)」となっている。これから判断すると、日本での中級の入り口というのは、日本語能力試験の三級の試験に合格できるぐらいのレベルということになる。

日本語を三百時間程度というのはどのぐらい学習すればよいのか。日本語学校の例でいうと、毎日午前中の授業を受け、半年ー七ヶ月ほどたったくらいである。教科書でいうと、「みんなの日本語」二冊終わった段階になる。

平成１３年度日本語能力試験平均点等は以下の表のようになっている。

級	文字　－　語彙	聴解	読解　－　文法	総合点
1	６９、２	６６、７	１２５、３	２６１、２
2	６４、５	５８、０	１０３、６	２２６、１
3	６５、８	４９、０	１２８、６	２４３、５
4	６９、８	５１、０	１２５、０	２４６、０

上の表の結果を見ると、三級と四級の総合点は２４０点で合格すると、合格点を越えた。しかし、二級と一級はまだ合格点をこえなかったものがたくさんいた。

それから、インドネシア教育大学日本語教育学科の学生は一年目に四級を受ける。二年目は三級で、三年目は二級で、四年目は一級である。以下の表のインドネシア教育大学の

日本語学科の日本語能力試験結果は、１９９８年度から２０００年度までの学生に対して、サンプルを取ったものである。

学年度	四級（合格）	三級（合格）	二級（合格）	一級（合格）
１９９８年度 （受験者３０人）	１３人 （９９年）	１３人 （００年）	１人 （０１年）	１人 （０２年）
１９９９年度 （受験者３５人）	６人 （００年）	４人 （０１年）	０ （０２年）	０ （０３年）
２０００年度 （受験者４２人）	２４人 （０１年）	２０人 （０２年）	１人 （０３年）	-

表からもわかるように日本語能力試験の結果は思わしくない。それから、その日本語学科生の中、「日本語能力試験の中で、どの分野が点が低いか」と２０人に尋ねた。結果は以下の通りである。

文字　－　語彙	聴解	読解　－　文法
０人	７人	１３人

上の結果から見ると、学習者の読解力はまだ良くなさそうである。非常に日本語能力試験を合格した人は少なく、特に二級と一級はほとんどいない。いったいどうして中級日本語が難しそうにみえるか。そして中級学習者に対して、どんな指導法がよいのかを調べたいと思う。範囲が広がらないように、私は読解の読み指導に範囲を制限する。

Ⅱ．本論

まず、読解の定義から行く。木村（1982）は「文を読んで内容を理解することを読解という。そのような能力、読解力を養成するための指導が読解指導である」(133 ページ)と述べている。普通、読解指導は購読によって行われるものとされている。「購読」というのは、学習者にとっては難解な文章を教材として、教師が文の構造を分析したり、語句の意味を解釈したりしながら、文章に盛られた内容を学習者に理解させるという作業である。

次に、日本語教育辞典によると、読解力とは、書かれてある文字と言う記号を目を通して認識し、その記号群の持つそれぞれの意味を総合的に把握する能力である。それを詳述すると次のようである。

１．文字を読みとること
２．文字の意味を知ること
３．文字によって構成される語の意味を知ること
４．語と語との意味的、構文的関係を知ること
５．語とそれが含まれている句との意味的、構文的関係を知ること
６．語とそれが含まれている文との意味的、構文的関係を知ること
７．句と句との意味的、構文的関係を知ること
８．句とそれが含まれている文との意味的、構文的関係を知ること
９．文と文との意味的、構文的関係を知ること
１０．文と段落との関係を知ること
１１．段落と段落との関係を知ること
１２．段落の大意や要旨をつかむこと
１３．文章の大意や要旨をつかむこと
１４．読み手に必要な内容かどうかを知るために全体をざっと読むこと
１５．未習の語彙や文型などを前後関係から類推すること
１６．書かれてある事実と書き手の意見とを判別すること
１７．書かれていない書き手の意図や立場を探ること
１８．書かれていないが当然予想される発展や結果を推量すること
１９．読み手の価値判断を持ちながら批判的な読み進むこと。

私はインドネシアでの読解授業を受けたときは日本語の先生が文章を読む前に１５分くらい「プレセッション」を設けて、文章を理解するために必要な背景知識を示したり、学習者間で知識の共有化ができるように、話し合いをさせたりしているが全然プレセッションをしないのもある。そして、先生は学習者に文章を読ませる。最初から最後まで読ませて、説明することもあるし、一段落だけを読ませて、説明することもある。時々説明する途中、先生は語彙の意味、文型など質問される。文章を説明した後、要約をまとめる。それから、学習者が理解できるか理解できないか、テキストに文章の質問を答えさせて、試みる。

ところが日本大学で読解授業を受けたのは多少同じところがある。授業の後、先生は次の授業の文章を始める前に読むように言う。それから「プレセッション」をして、先生が文章を読まれる。読んだ後学習者に内容が理解できるかどうかを聞く。わからないところがあれば、学習者が質問する。わかれば、先生は再び文章を読みながら、学習者に語彙の意味、同意語、反意語、分脈などを聞く。それから、その時出てくる語彙、文型とかの説

明を配る。時間がまだあれば、それを説明するが時間が来られば、次の授業で説明する。
　それから木村氏がよくわかる中級の教え方（70 ページ）に以下のように述べている。
内容が理解できるとは、どういうことなのであろうか。ここで、これまでに行われたきた母語における読みの研究の中から、三つの読解処理のモデルを見てみよう。

（１）ボトムアップモデル、これは文章を読む場合に、単位の小さいものから大きいものへという順に処理するというものである。まず、文字を確認し、文字から成る語の意味を理解する。次に語から成る句の意味、句から成留文の意味を理解し、最終的にそのような単位の組み合わせである文章の全体の意味を理解するというものである。
（２）トップダウンモデル、文字通りに解釈すれば、ボトムアップの逆をいくわけであるから、より大きな単位から小さな単位に向けて読解処理をするということになる。しかし、門田・野宮(2001, 14 ページ)は「このような処理は実際には不可能である」とし、「トップダウンモデルとはテキスト処理において、読み手が重要で、支配的な役割を果たす読み手駆動(reader-driven)のモデルと考えるのが適切である」と述べている。簡単に言うと、文章を読むとき、自分が持っている様々な知識を活用して文章の内容を理解しようとしているということである。
（３）相互作用モデル、門田・野宮(2001, 3 ページ)によれば、相互作用とは「読み手とテキストとの関係ではなく、読みにおける様々な構成技能間相互の処理関係」のことである。これは、単語の意味を知らないために文章を理解することができないときには、自分のもっている知識を使って何とか理解しようとし、逆に知識がないときには言語情報だけで文章を理解しようとすることである。

　これらを踏まえて、中級レベルの読解指導について文法的な読みはボトムアップ処理をしていると考えられる。日本語学習者が一般の日本人のために書かれた文章を読むときにはトップダウン処理における読み手の知識が十分に活用できないということである。
最近の中級読解教材では、実際に文章を読む前に「プレセッション」を設けて、文章を理解するために必要な背景知識を示したり、学習者間で知識の共有化ができるように、話し合いをさせたりしている。学習者も母語ではトップダウン処理をしているはずですから、それを日本語学習にも活用するようにするわけである。
　これまで私は受けた読解授業はボトムアップモデルで、時間が十分あって、精読である。しかし能力試験のための短い時間で解いてみる読解授業を受けたことがない。ところが日本語教育辞典は以下のようにのべる。
　読解は一般に精読、多読、速読の方法によってなされる。精読では１から１３までのこ

とが特に日本語教育の初級、中級の場では、語彙や文型の習得は重要なものであるから、文脈や場面の中でそれらの使われ方をみるという意味も含めて精読が行われるのである。中級後半から上級になると、精読は評論文や説明文のような複雑な文構成を持つ文章についてなされ、文構成の解明に基づく正しい内容把握を目指す、そこでは連帯、連用修飾句の係方や指示語の指示内容、接続語の使われ方などが問題となり、更に１６から１９のことについても注意しなければならない。基礎的な文型や語彙の学習が終わった中級以後の段階では、多読、速読が精読に加えられる。多読と速読では１２から１５までが読み方の中心となるが１６から１９も十分考慮しなければならない。日本語教育では多読、速読の教材は少ない。多くの時間を漢字学習を費やすために、読解力の進歩は学習者に意識されにくいのだが、語彙数の限定した多読，速読用教材いろいろの分野について作れれば、学習者の読解力の向上の非常に役立つだろう。

III．まとめ

上に述べたように、日本語教育では多読、速読の教材は少ない。多くの時間を漢字学習を費やすために、読解力の進歩は学習者に意識されにくいのだが、語彙数の限定した多読，速読用教材いろいろの分野について作れれば、学習者の読解力の向上の非常に役立つだろう。ということで最初のページの平成１３年度日本語能力試験読解の結果はなぜ思わしくないわけがわかった。大体読解の授業で行われている方法は精読だから多くの学習者は多読あるいは速読には慣れていないのである。それから日本語能力試験のためにトップダウンモデルあういは相互作用モデルはいいと思う。大きな単位から小さな単位に向けて読解処理をするのは短い時間に読解問題を解いてみることができると思う。自分が持っている様々な知識を活用して文章の内容を理解する。しかし逆に知識がないときには言語情報だけで文章を理解する。そう言う方法で早く解くことができると思う。学習者が多読または速読に慣れているために特別な多読、速読を授業の後、これから始めるべきだろうか。

参考文献

小川　芳男・林　大、1982『日本語教育辞典』大修館書店
木村　宗男、1982 『日本語教授法　研究と実践』凡人社
坂本　正、よく分かる中級の教え方、2002『月刊日本語五月』アルク
高木　京子、1980　『中上級の読解教育』国立国語研究所